

放流用アユ種苗の大型化に挑戦！

内水面総合センター

○放流用アユ種苗について

内水面総合センターでは、人工種苗放流による天然資源への悪影響（再生産性の低下や遺伝子汚染など）を最小限に抑えるため、主として県産の天然アユを親とした「資源に優しい種苗」を生産しています。とはいえ、まずはアユの放流をされている漁協さんに釣り用種苗として魅力があると思ってもらわなければなりません。（つまり、購入していただければなりません！）

そこで、今回は各漁協さんから長年にわたり要望のあった種苗サイズの大型化に挑戦してみました！

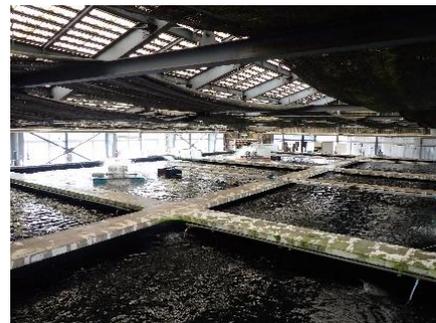


図1. アユ用 100t 水槽

○大型化への取り組み

例年の生産体制では、0.5g サイズの種苗を 100t 水槽 6 面に 20 万尾ずつ収容し、出荷時期まで飼育していました。生産初期は、アユも小さいため、給餌率を高く設定することができますが、サイズが大きくなるにつれて糞が増え、水質が悪化していきます。そのため、どうしても成長に合わせて給餌率を下げなければなりません。また、給餌効率の低下や密度の上昇も相まってなかなかアユは大きくなってくれず、出荷時点で平均 6g サイズにするのが限界でした。

アユの成長に影響する要素は種々ありますが、簡易に操作ができるものとして①収容尾数、②給餌率、③水温 が挙げられます。今回はコストがかからない①と②を中心に調整し、例年より体重で約 20%増の 7g を目標に生産を行いました。

まず、①の操作ですが、例年の 50～75%程度の収容数に収まるよう、各水槽に 10～15 万尾のアユを収容しました。（本格的に生産試験するのであれば、1 水槽は例年と同量の収容尾数にして比較すべきところですが、施設の規模や予算の面で断念しました。）

続いて、②の操作ですが、例年は 4%から給餌を開始していたところを、今年は 5%から始め、水質や餌食いが悪くなるギリギリまで給餌率をキープし、段階的に率を落としていきました。

以上の簡単な操作でしたが、気を配ることは多く、アユと睨めっこをする毎日でした。アユが調子を崩した場合は、餌止めや投薬をするため、その時点で他水槽との比較ができなくなることや 1 尾当たりの重量が減ってしまうなどの悪影響が出てしまいます。ですので、給餌率を落とすタイミングには特に注意していました。



図2. 遊泳の様子



図3. 今年の出荷サイズ

○取り組みの結果

今回は、すべての水槽で目標の 7g を越える種苗を生産することができました。来年以降は更なる大型化を目指します！ と宣言したいところですが、次年度も 7g 種苗の生産が再現できるようにデータの整理と準備に努めていきます。（開発調査グループ 千葉）